「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組
「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～京都市～

・新学習指導要領の全面実施に向け，各校種における教材理解や指導法の改善及び接続校種の指導内容に関する理解を更に深める必要がある。
・小学校における外国語活動の早期化・教科化や，中学校における英語で行うことを基本とする授業への対応に向けて，教員の英語力向上が引き続き課題。

〇研修の充実・研究指定校による研究と研究内容の全市への普及・各校での研究及び研究団体への取組の支援。
〇イントラネット上に構築した「総合教材ポータルサイト」及び総合教育センター内に設置の「カリキュラム開発支援センター」におけるコンテンツの充実。

【取組内容】
・小学校教員を対象とした研修（全42回），中学校教員を対象とした各種研修（全61回），高等学校教員を対象とした研修（全39回）の実施。
・研修協力校及び研究指定校による実践的研究と実践発表や公開授業による成果の普及。
・高等学校英語教員海外研修支援事業の実施。
・英検準1級以上等未到達の全ての中・高の英語担当教諭を対象に，TOEIC対策講座及びTOEIC IPテストの悉皆受験の実施。
・全市から集めた優れた授業映像や研修資料を学校内で活用できる「総合教材ポータルサイト」の構築。
・教科等の研究団体の中核的役割を果たす教員に，本市独自の「京・教育研究・研修指導員（シニア・マイスター），同推進員（マイスター）」を委嘱し，研究団体や校内研修等を含む各種研修において実践発表等の指導的役割を担い，集合研修・校内研修体制の構築を図る。
・総合教育センター内に設置の「カリキュラム開発支援センター」において，小・中学校で活用できるリーディング教材の紹介，歌やリスニング，絵本の読み聞かせなどの指導例・取組例の掲示等を行うとともに，英語の絵本や教材教具を整備し，貸出し・配信することで，授業や校内研修の充実を図る。

今年度新たに実施した研修「English Exchange:ALT&YOU」の様子（小学校・総合支援学校の教員対象）

【成果と課題】

校種	指標内容	H25 現状	H26 目標値	H26 達成値	H27 目標値	H27 達成値	H28 目標値	H28 達成値	H29 目標値	H29 達成値	H30 目標値	H30 達成値
高等学校	求められる英語力を有する英語担当教員の割合（%）	69	75	73.8	80	76.7	85	82.8	90	85.2	90	84.9
	求められる英語力を有する生徒の割合（%）	45.3	50	48	55	51.4	60	54	65	56.6	65	62.2
	生徒の授業における英語による言語活動時間の割合（%）	60.6	70	63.9	80	63.2	85	81.5	90	84.2	90	82.5
	英語担当教員の授業における英語使用状況（%）	51.5			80	69.7	90	79.4	100	84.8	100	81.2
中学校	求められる英語力を有する英語担当教員の割合（%）	29.2	40	28.6	50	27.7	60	36.5	70	43.2	50	48.1
	求められる英語力を有する生徒の割合（%）	32.4	38.3	41.1	44.1	40.7	50	42.9	50以上	43.1	50以上	45.6
	生徒の授業における英語による言語活動時間の割合（%）	45.3	58	51.4	72	65.3	86	67.9	100	66.4	100	78.7
	英語担当教員の授業における英語使用状況（%）	45			72	63.1	86	63.5	100	69.5	100	77.9

※H30の達成値はH30.12月時点の暫定値

・全ての数値において改善が見られるが，目標値には届いておらず，取組の継続が必要。

【成果の波及・周知】
・各種研修における実践発表や公開授業の実施や，「総合教材ポータルサイト」における授業映像や研修資料の発信。

【課題解決のための手立て】

研修・各種事業の計画 → 研修・各種事業の実施 → アンケート評価，各種調査結果，学校訪問による見とり，京都市英語指導力向上検討会議 → 研修内容・実施事業の見直し

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～京都市立開睛小中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- 新学習指導要領実施に向けた小学校（前期課程）英語教育の充実と，9年間共通のねらいに基づく小中一貫カリキュラムの開発に向けた研究
- 自己指導力（情報活用力と相互交流力）の育成を目指した，外国語活動・英語科授業での多様なコミュニケーション活動の開発

具体の取組の内容

3年生から6年生の外国語活動では，外国語や外国文化に慣れ親しむことで7年生からの専門的な学習の素地を形成し，7年生から9年生では，6年生までに培われた外国語への興味関心とコミュニケーションへの積極的な態度を，より専門的に伸長する。そのために充実した言語活動を実施し，本校の研究主題である「自己指導力の育成」へとつなげるため，英語教育として「情報活用力」と「相互交流力」を意識した取組を進め，主に以下の項目で授業改善に取り組んだ。

〇3年生から6年生（前期課程）における授業づくり

◆ALT，後期課程英語科教諭との組織的・効果的な連携　◆必然性のあるコミュニケーション場面を設定し，その場面に応じた適切な発話を促す多彩な言語活動の実施（「買物」・「レストラン」等の具体的な状況）

◆英語を体験的に習得し，自然な発話につなげるためのチャンツの導入◆意欲関心を高めるためのICT機器の活用

◆「英語を書く」につなげるための学習機会の工夫（視覚教材によるアルファベットの提示等）

〇7年生から9年生（後期課程）における授業づくり

◆学習意欲の向上と基礎学力の定着を図る協働的な学習形態の研究　◆自然に「書く」活動（ライティング）に移行する授業展開の工夫と実践　◆多彩なライティングの機会の準備（日本文化紹介や人物紹介など発信重視の課題の設定）　◆新出語彙や言語材料を習得させるための小テストとノート指導　◆能動的な学習スタイルを確立し相互交流力の向上を目指す協働授業の実施(6年生と9年生で実施)　◆英語検定受検のさらなる推奨（卒業時の3級取得率の向上）

6年生と9年の協働授業の様子

開睛マルシェで買い物という状況の言語活動

成果①

(1)全国調査生徒質問紙(H29)との比較

〇外国の人と友達になったり、外国のことについてもっと知ったりしてみたいと思いますか。9年生:《当てはまる》**本校40．2%**

京都府36．8%　全国36．6%

(2) 2018年度第1回英検のスコアの結果

級	集計内容	Reading	Listening
3級	本校平均	418	388
	全体平均	403	377
4級	本校平均	428	338
	全体平均	357	323
5級	本校平均	322	336
	全体平均	297	265

成果②

◆前期課程では，継続した外国語活動の取組により，英語への興味関心が高まり，英語を使った相互交流への抵抗感が低くなったことが見てとれた。後期課程では，英語を用いた情報活用と相互交流の裏づけとなる英語力の向上が見られた。英検の合格率は向上し，成果①の表の通り，スコアで全国平均を上回っている。これらは，本校英語科での授業で培った自己指導力やコミュニケーションへの意欲の向上を反映していると言える。

◆成果①(1)の結果より，前期課程で培われたコミュニケーションへの高い意欲が，後期課程においてそのまま英語を使った的確な情報活用力と相互交流力の育成につながり，国際感覚についても身につきつつある状況が見てとれた。

今後の課題・方向性

(1)今後の課題

◆英語に対する自信のなさから，「難しい」という思いを持つ児童生徒もいる。「情報活用力」という観点では，まだ情報を「得る」ことに留まっており，十分な「活用」には至っていない。◆後期課程では，「英語を書く」能力に課題が大きい。◆授業において積極的に発表しようとする生徒には偏りがあり，より積極的な相互交流にむすびつかない。

(2)方向性

◆協働的学びを適切に取り入れ，コミュニケーションへの意欲と，学力の向上につなげる授業方法の研究を行う。

◆「読む」「書く」技能の学力向上を目指した取組を継続し，授業方法の改善に加えて，スモールステップを意識したテストの実施，ノート指導，家庭学習課題の工夫を行う。

◆タブレット型パソコンの効果的な活用の研究を行い，授業における効果的な活用方法について研究を深める必要がある。

平成28～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～京都市立日吉ケ丘高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

・新学習指導要領の趣旨を踏まえ，授業は英語で行うことを基本とし，本校「英語村」での活動も連動させながら，4技能を総合的に育成できる指導を研究，実践しており，「英語村」は生徒の英語学習に取り組むモチベーションを上げ，言語活動をさらに活発にする働き，授業の補佐的役割も担うなど効果を上げている。しかし，一方で，数多く設定している英語に関する専門科目や選択科目を含めた，体系的な指導の構築にまでは至っていない。引き続き，すべての科目において，CAN－DOリストの形での学習到達目標に基づき，指導と評価の一体化を図るとともに，今年度は特に各コースの達成目標，指導方針，目標達成のための方策，各科目の位置づけの可視化を行い，全教員が有効な指導法を共有し実践することを目指している。

具体の取組の内容

・授業内にインテイクした事柄を実践的に使えるよう，与えられたトピックや自分のことに関して「書く・話す」活動や課題をこまめに入れるよう心がけている。更にその内容を「英語村」に行って，授業のプロセスを知らない第三者に話し，対話することによって実践出来る工夫をしている。
・「英語村」においてALTや英語科教員が昼休みや放課後に生徒と自由に話して生徒の英語に対する興味関心を引き出すとともに，授業とも連携し，パフォーマンステストの評価等も行い，より実用的な側面を強化している。
・パフォーマンステストを行う際には，ルーブリックを作成して教員，生徒ともに身につけるべき力を認識できるようにしている。次期学習指導要領を意識し，論理的に伝えることも生徒に意識させている。
・指導計画表H-PLAN(仮称)の作成を行い，学年，コース，科目ごとの到達目標や指導方針の共有を行っている。
・2年次生と3年次生とで学年を超えて交流授業を行うことで，生徒の学習意欲を刺激し，2年次生にとっては1年後到達すべき目標をイメージできるような機会を設けた。

成果

［教員］
・「英語村」をより積極的に活用することを重視し，パフォーマンス（話す，Retelling，スキットを演じる，ディベート，ディスカッション，プレゼンテーションなど）や英作文等，生徒の表現力に重点を置くようになった。
・同学年，コース内で同一の目標，評価基準を設定し，生徒の実態を報告し合うことで，より明確に生徒の力を把握できるようになった。
・各科目の役割を認識することで，科目間の住み分けが進み，科目横断的に生徒の英語力育成の視点を持てるようになった。
・4技能を重視することにより，観点別評価を重視するようになった。
［生徒］
・「英語村」を使うことや，パフォーマンステスト等の多数実施により，英語を使うことに対する抵抗が薄れ，英語を使うことは楽しいこと，と認識している生徒が増えている。「英語村」を訪れる回数が増えていることからもその様子が伺える。英語村が始まった一昨年では平均して1日84．5人であった来村者が今年度は110．7人となった。こうした英語に対する関心の強まりが英語力向上に寄与していると考えられる。
・授業中，英語で話を聞かねばならないため，また，言語活動が多いため，生徒の授業態度が受け身ではなく，積極的になっている。授業に集中していなければついていけない，という意識が生まれているように思われる。

今後の課題・方向性

・本校カリキュラムの特徴上，一人の教員が持つ授業の種類が多い為，他教員の授業研究を見に行く時間や，一つの授業研究に割ける時間が非常に少ない。また，各教員が行っている授業，研究成果を共有するのが依然として難しい。
⇒学年チーム担当制を実現させ，授業交流のための会議を持つなどの担当者間交流を活発化させるとともに，担当科目の割当をより体系的になるように見直し，英語科全体として業務の効率化を図る。

平成26～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～京都市立紫野高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

・「生徒の言語活動の充実」に焦点を当てた授業実践を目指して，各学年各チームでパフォーマンス課題を年間を通して設定し実践していく。
・指導と評価の一体化の為に，本校生の現状に応じたCAN－DOリストの形での学習目標の設定を行う。

具体の取組の内容

各学年各教科，パフォーマンス課題をこまめに設定し，知識や技能の「習得」だけでなく，「実践」できる力をつけるための工夫を行っている。「コミュニケーション英語」の授業においては，プレゼンテーション・ディスカッション・ディベートを中心に，「英語表現」の授業においては，パラグラフライティング・エッセイライティングを中心に研究を行っている。中心となって研究する教員の授業をモデル授業として設定し，公開授業を行い，年度末に研究報告として授業ビデオ（言語活動ビデオ）を作成し，京都市立高校全体で共有する予定である。

平成26年8月に第1案として，CAN-DOリストおよび各学科，コース毎の3年間の英語学習プランと，学年毎の学習到達目標の設定を行った。以降，毎年検証・修正を行っている。ここでの学習到達目標は，できる限り具体的数値で示せるもので設定し，指導過程での到達度合いを検証しやすくしている。これら2つを基に作成したシラバス（評価規準）をオンライン上で生徒および保護者に公開している。

成果①

・数多い言語活動や英語インタビュー，パフォーマンステストにより，英語で表現することに対して積極的になった。
・授業外での英語を用いた自主的活動（コンテスト参加・国際交流　参加など）を行う生徒が増えている。

◆GTEC得点の推移（H28～H30年度入学生）

		アカデミア科			普通科アドバンストコース			普通科スタンダードコース		
		1年次	2年次	3年次	1年次	2年次	3年次	1年次	2年次	3年次
H30入学生	TOTAL	522.5			442.1			407.8		
	reading	178.2			155.4			147.2		
	listening	215.9			173.7			157.2		
	writing	128.4			113.0			103.4		
	WPM	83.3			69.8			65.1		
H29入学生	TOTAL	522.3	586.0		446.5	470.7		434.5	450.9	
	reading	179.0	207.2		159.6	168.2		156.0	157.7	
	listening	213.0	245.9		167.4	183.0		164.2	178.8	
	writing	130.3	132.8		119.4	119.5		114.4	114.3	
	WPM	83.2	99.6		72.5	77.0		70.2	71.0	
H28入学生	TOTAL	527.5	595.4	637.8	465.7	496.1	536.1	410.1	428.9	465.6
	reading	190.2	218.1	239.3	166.0	180.2	197.5	151.7	156.2	167.9
	listening	211.1	249.4	267.4	177.2	190.5	213.0	156.2	163.6	179.7
	writing	126.4	128.0	131.1	122.5	125.4	125.6	101.5	109.1	118.0
	WPM	90.0	105.9	116.5	75.8	84.9	94.5	67.8	70.2	77.2

成果②

・CAN-DOリスト，英語学習プラン，評価規準（シラバス）の共有が実現し，育成しようとする生徒像や，到達目標について教員間の共通理解が進んだ。
・学年，コース内でどの教員も同じ到達目標，評価規準を持つことで，教員間での情報交流や資料の共有，学年をまたいだ資料の引き継ぎも進み，教材研究にかかる負担の軽減につながっている。
・指導の際，指導内容の偏りを解消し，4技能のバランスを考慮しようとする意識および観点別評価をしようとする意識が向上した。

今後の課題・方向性

・それぞれの課題に対して，いかにして生徒の成長につながるフィードバックをしていくかが次の最大の課題である。エッセイの添削等は教員にとって過剰な負担となりがちであるが，そうならないフィードバックという要素も合わせて研究中である。
・個人や研究グループの研究や実践を，全体で共有することも今後の課題である。例えば，校内で研究授業や研究会を計画しても，英語科教員全員が参加できる状況を作ることは難しい。共同研究，共通認識を図ることができるよう，教科会議での情報交流を進める。